

まつざき 天民

松崎天民の歌碑建立

奥津湯の情あつきに 一夜寝て 雪に明けたる 今朝のよろしき

癸酉正月 松崎天民

この歌は、昭和八年（一九三三）に奥津温泉の河鹿園に宿泊した松崎天民が詠んだもので、奥津溪北端の自然石にこの歌を刻んだ歌碑が建立されています。

松崎天民（二八七八―一九三四）は、落合町（現真庭市）出身の新聞記者で、当時その敏腕ぶりは有名だったといえます。また、その傍らで書いた小説・随筆などは「天民調」と呼ばれ、人気を博しました。奥津温泉には幾度か来訪し、講演なども行っていたようです。



松崎天民の歌碑（奥津川西）



碑に刻まれた歌



『食道楽』の記事
所蔵：味の素食の文化センター

道楽』という雑誌の昭和十二年五月号に、天民の歌碑建立の記事があり、そこには除幕式の写真と「松崎天民翁の歌碑が本年四月七日翁が郷里岡山縣作州の奥津温泉に建てられました」と書かれています。また、当時の新聞「合同新聞」の昭和十二年四月八日夕刊には友人の長谷川伸、土師清二、甲賀三郎と天民の子・松崎哲郎が、七日午後三時から行われる歌碑の除幕式に参加するために奥津を訪れたことが記事になっています。

これら二つの資料から、天民の歌碑の建立が昭和八年ではなく、実際は十二年の建立であることが明らかになりました。では、なぜ歌碑の銅板には昭和八年となっているのかについてですが、その理由はわかりません。しかし、「津山朝日新聞」昭和四十六年（一九七二）一月四日の記事によると、この銅板は戦後間もなく持ち去られ、原文はわからないままでしたが、発起人の一人である友保知氏宅で原文が見つかり、友保氏の自費で復元された（大意）とありますので、これが事実であれば歌碑の建立は昭和十二年ですが、銅板の銘文は八

年に書かれたものという推測もできます。

また、「津山朝日新聞」昭和四十六年六月一七日に、牧野英一氏による天民歌碑除幕式の回想として、「式後に津山の対鶴楼で歓迎の宴が持たれた」と書かれ『奥津町史』にも引用されていますが、前記「合同新聞」の記事には、「午後零時五四分に津山に到着し、河鹿園で温泉に入り除幕式に列席、その後奥津荘で有志による歓迎会があり、河鹿園で宿泊、翌日には岡山に帰った（大意）」とあり、同時に書かれた新聞記事の方が信憑性は高いと考えれば、歓迎の宴は対鶴楼ではなく奥津荘で開催されたと思われます。牧野氏は、実業家で村会議員・県会議員も歴任していますので、こうした宴席をたびたび経験していたと考えれば、三〇年以上前の記憶が混同した可能性も考えられるでしょう。

この調査成果は、奥津温泉の歴史を新たにするだけでなく、歴史調査における一次史料（当時に書かれた史料）の重要性を証明した非常に意義のある成果といえます。

参考資料：大西小生氏の調査資料、『岡山県歴史人物事典』『奥津町史』『落合町史』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733